

Title	「イヌを学ぶ、イヌに学ぶ」(9月11日 三田キャンパス西校舎517教室)
Sub Title	
Author	伊澤, 栄一(Izawa, Eiichi)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2011
Jtitle	Newsletter Vol.17, (2011. 10) ,p.6- 6
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	一般公開シンポジウム
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000017-0060

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

去る9月11日、三田キャンパス西校舎517教室にて一般公開シンポジウム「イヌを学ぶ、イヌに学ぶ」が開催された。当拠点共催による同シンポジウムは、9月7～11日に三田キャンパスにて開催された日本動物心理学会、日本動物行動学会、応用動物行動学会、日本家畜管理学会の4学会合同大会 Animal2011 のサテライトイベントとして開催された。イヌは近年盛んに研究されている動物である。認知や生理、遺伝子研究をベースに、それらをオオカミと比較することで、家畜化と行動進化の関係を探る研究がなされている。本シンポジウムは、最新の研究成果を一般の方々に発信する試みであった。我々の暮らしに最も身近なイヌという動物をテーマにしたこともあり、Animal2011の参加研究者だけでなく、一般者の来場も多く、インターネット・書籍などのプレスの参加もあり、関心の高さが窺えた。

冒頭、イントロダクションとして、オーガナイザーの長谷川寿一教授（東京大学）から、イヌの行動研究の特色はその学際性にあることが紹介された。イヌ研究は、ヒトがオオカミを家畜化した約3万年の歴史によって、オオカミとイヌにいかなる認知・行動上の違いが生じたのかという進化的理解を与えるだけでなく、品種間比較によって、様々な行動特性を担う遺伝子・生理メカニズムの解明にもつながる。当然これらは、伴侶動物・家畜動物・有用動物としてのイヌの応用行動研究に直結する。このような学際性こそがイヌ研究の魅力といえよう。

第一演者のÁdám Miklósi 教授（Eötvös Loránd 大学）は、イヌの行動・認知研究を牽引する世界的研究者である。はじめに、イヌは、問題解決事態に直面したとき、実験者に協力を促す行動を示すが、これはオオカミには見られないこと、また、実験者の指差しに対する反応は、ヒト1.5歳児と比べて低いというデータを元に、擬“オオカミ”的、擬“ヒト赤ちゃん”的なイヌの理解が必ずしも適切でない点を指摘された。代わりに示されたのは、イヌの行動・認知の生態学的ニッチは、ヒトとの友好関係形成にあると主張された。その根拠として、イヌのヒト模倣能力と“吠え（barking: いわゆるワンという音声）”によるコミュニケーションが挙げられた。模倣とは相手の行動を真似することであり、ヒトの母子関係など、模倣それ自体がコミュニケーションとしての機能をもつ種・個体間・文脈で生じると考えられており、ヒト以外の動物での実証例は少ない。イヌは、実験者がジャンプするとジャンプし、実験者が床を転がると転がる。体のつくりが異なるヒトの行動を模倣する点で、特異な能力をもつといえる。吠えについて興味深いのは、オオカミはこれに相当する音声レパートリーをもたないことである。Miklósi 教授は、イヌの吠えは家畜化によって開発された、ヒトとイヌとの異種間コミュニケーション信号である可能性を述べられた。吠えは、既知・未知のヒトに

対して鳴き分けられるなど、ヒトとのコミュニケーションに重要な情報を符号化しており、かつ、ヒトはそれらを弁別・カテゴリー化することができることから、吠えとヒトによる家畜化の関係を指摘された。これらのような、旧来型の単なる種間比較にとどまらない、ヒトとの関係を念頭に置いたアプローチはイヌの行動研究の中核となっていくであろう。

村山美穂教授（京都大学）は、遺伝子レベルからイヌの行動特性を解明する試みについて話題提供された。ある遺伝子の端部の繰返し数と行動との対応・相関を明らかにし、オオカミとイヌの品種間比較を行うことで、遺伝子レベルの進化や、遺伝子と行動の関係を探る試みである。例えば、攻撃性の高低と相関すると考えられているドーパミンD4受容体遺伝子の端部繰返し数は、オオカミ>アジア在来種>アジア種>欧米種の順に長短差があり、実際に社交性は欧米種が高いことを示された。他にも、セロトニン1A受容体、セロトニントランスポーター、アンドロゲン受容体についても、社交性と相関することを報告された。このようなアプローチは、例えば有用犬の個体レベルでの適正を測るスクリーニング法として有効であり、上記遺伝子によるスクリーニングによって盲導犬の合格率が約30%も上昇したことを述べられた。

菊水健二教授（麻布大学）は、イヌとヒトの間に形成される愛着の内分泌的メカニズムを解明する試みについて話題提供された。まず、イヌの特徴として、イヌ同士はもちろん、ヒトとも盛んに遊ぶことを指摘された。近年、遊びは、脳内のエンドルフィン分泌を促進する報酬効果をもつことが指摘されており、他にもドーパミン、オピオイド、オキシトシンなどの放出とともに、遊び相手との愛着の形成に寄与しているという仮説を提起された。イヌと視線を長く合わせた飼い主の尿中オキシトシン濃度が上昇し、また、飼い主になでられたイヌの同分子尿中濃度が上昇するという大変興味深いデータを示された。

いずれの演者も、ヒトとイヌ双方の視点から認知・行動を支えるメカニズム・進化を探るという点で共通点をもつのが特徴であった。このようなアプローチは、今現在イヌが我々に身近な動物であるというだけでなく、家畜化という歴史に行動・認知の背景を求めるものに他ならない。今後、ヒトを含めた動物の心の進化研究として、ますますその学際性が発揮されていくように感じた。

(伊澤栄一)

A public-open symposium “Studying about dog, studying from dog” was held on 11 September at West Building of Mita campus. Profs. Ádám Miklósi, Miho Murayama, and Kenji Kikusui gave lectures on dog behavior from the perspectives of evolution, genetics, and endocrinology.

